研究ノート

分業についての経済学的考察（後編）

——社会主義社会における「分業廃棄」の問題の検討のために——

原田　実

まえがき
一、山内一男氏のマルクス分業論の解釈について
二、山内一男氏の社会主義社会における「分業廃棄」の「理論構成」について……（以上、前号所載）
三、商品生産と分業
四、資本主義的生産と分業
（1）マニュファクチュアと分業
（2）機械制大工業と分業
五、社会主義社会における「分業廃棄」のための若干の基本的方策について
六、要約……（以上、本号所載）

三　商品生産と分業

マルクスは『資本論』第一巻第一章で商品生産と社会的分業の関係についてつぎのごとく述べている。

「いろいろに違った使用価値、または商品体の総体のうちには、同様に多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体——社会的分業が現われている。社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない。古代インドの共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物が商品になるということはない。あるいはまた、もっと手近な例をとってみれば、どの工場でも労働は体系的に分割されているが、この分割は、

労働者たちが彼らの個別的生産物を交換することによって媒介されてはいない。ただ、独立に行なわれていて互に依存しあっていない私的労働の生産物だけが、互に商品として相対するのである」（『資本論』〈全集二三巻五七頁〉

工場内分業については後に論じるとして、商品生産と社会的分業の関係についていえば、ここでマルクスが述べているように「社会的分業は商品生産の存在条件である」が、「商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない」。つまり、商品生産に媒介されることなく社会的分業は実存しうるのである。しかし、このことは、社会的分業は歴史的に商品交換に媒介されることによってのみ広範に発展してきたという事実を否定するものではない。ここでマルクスが商品交換なしに社会的分業が存在した例としてあげている古代インド的共同体の社会的分業は、きわめて狭い範囲において存在したにすぎない。しかも、この古代インド的共同体の社会的分業――ここではそれぞれの生産諸部面は一つの直接に結成された全体の特殊な諸器官を形成するのであるが――も、他の共同体と、接触するにつれて、それぞれの諸器官＝生産諸部面が「互に分離し、分解し、独立して、ついに、いろいろの労働の関連が商品としての生産物の交換によって媒介される」（『資本論』前出四六二頁）ようになったのである。当時の生産力水準のもとでは、社会的分業は特殊的職業領域への個人の拘束として、そしてこの拘束が私的所有へと発展することによって、したがってまた商品交換に媒介されることによってのみ発展することができたのである。

そこで以下、私的所有のもとで社会的分業が如何に行なわれ、如何に発展させられるか、そしてそれによって人間労働力がどのような影響をこうむるか、ということについて考察しよう。

私的所有のもとでは、各々の生産者は、私的に、自分の恣意で、自分の計算で生産する。獲得された生産物は、もちろん彼自身のものであるが、しかしこれらの生産物は彼個人の欲望を満すものではない。もし、これらの生産物が彼個人の欲望をすべて満し、それによって彼の全生存が維持されるならば、そこには社会的分業の関係はないことになり、したがってまた私的所有ということもできない。なぜなら、私的所有という概念は、他人に対して独立に、排他的に生産手段を所有するということであり、すでにそれ自身のうちに他人に対する関係＝社会的関係を表現しているのであり、したがって個々人が自分の生産物で自分の欲望を満してしまうならば、それはちょうどロビンソンの生産と同じであり、他人に対する関係は存在しないことになり、彼個人で一つの社会を構成することになってしまうからである。要するに私的所有という概念は、すでにそれ自身のうちに社会的分業を前提しているのである。では、各々の生産者がそれぞれ勝手に、自分の恣意で、自分の計算で行なう生産が、如何にして社会的分業の一環を構成しうるであろうか。

いうまでもなく生産物の私的交換によってである。各々の生産者は一種類の、あるいは数種類の使用価値の生産を担当する。しかし、彼は自分の生産した使用価値だけでは生存していくことはできない。彼は自己の生産物を、それを必要とする他の生産者に譲渡し、代わりに彼の必要とする生産物を受け取ることによって生存を保証される。つまり、私的所有のもとでは、生産物の私的交換が一個の法則とならざるをえない。そして、この私的交換が成立することによって始めてそれぞれの生産者は社会的分業の一環を形成していることが実証されるのである。このように私的所有のもとでは、生産物の私的交換において始めてそれぞれの生産者は社会的分業の一環を形成していることが事後的に実証されるのであるが、しかしここで問題になるのは、生産物の私的交換そのものが如何にして行なわれるかということである。ここに労働の二面性および労働の対象化について的確な把握が必要となるのである。

まず、明らかなことは、交換が行なわれるためには、交換される生産物が相互に他人のための欲望を満すものでなければならないということである。だが、このことは交換が行なわれるための前提ではあるが、これによってただちに交換が行なわれるかといえば、決してそうではない。交換が成立するためには、交換される両方の生産物が互に等しいものとして関係することが、換言すれば両方の使用価値が等置の関係に置かれることが必要である。では使用価値を異にする——使用価値を異にするからこそ交換されるであるが——したがってそれぞれ労働様式を異にする具体的有用労働の生産物がいかにして等置の関係に置かれるのであろうか。いうまでもなく、労働の具体的有用的形態を捨象した、人間の頭脳、手足、神経の一般的支出としての抽象的人間労働の側面においてである。この側面において両者は互いに共通なものとして比較され、交換されることが可能となるのである。

種々の使用価値に結果するどの具体的有用労働も、ただ人間の頭脳、手足、神経の支出の仕方様式を異にするだけであって、その支出の仕方、形態を捨象すれば、同じ人間の頭脳、手足、神経の生産的支出としての労働である。相異なる使用価値は、したがって相異なる具体的有用労働の生産物は、このように抽象的人間労働の側面において、同じ人間の頭脳、手足、神経の生産的支出として、同質のものであり、したがって相互に比較され、交換されることが可能になるのであるが、しかし、ここで注意しなければならないのは、抽象的人間労働といえども、労働を現実に流動させている過程においてはまったくの私的労働であって他の生産者となんらの社会的関連をとり結んでいないということである。彼らが社会的関連に入るのは、労働を終えた後に、つまり彼らの労働が生産物に対象化し、生産物が相互に等置、交換の関係に置かれたときにである。それ故、相異なる使用価値が等置の関係に置かれるのは、抽象的人間労働の側面においてであるが、しかしそれがそうなるのは、その

抽象的労働人間が生産物に対象化したときに、いいかえれば、抽象的人間労働が生産物の価値として結晶したときにである。したがって、私的所有のもとでは、労働はそのものとしては――具体的有用労働の面においても抽象的人間労働の面においても――まったく私的所有者の私事として営まれ、それ自体社会的分業の一環を構成するものではないが、抽象的人間労働が生産物に対象化することによって、すなわち生産物が使用価値のほかに価値という属性をもつことによって、そしてこの価値において相異なる使用価値が互いに等しいものとして比較され、交換されることによって、私的労働は社会的分業の一肢体を担うことができるのである、あるいはつづめていえば社会的労働に成る（Werden）のである。それ故、私的所有のもとでは、人間の労働は、彼がどんなに額に汗して労働しても、労働そのものはなんらの社会的意味をもちえず、労働が生産物に対象化し、価値として結晶したときに、つまり生産物同士が互に交換関係＝価値関係をとり結んだときに、その労働は社会的分業の一環を形成するということが事後的に実証されるのである。それ故また、私的所有のもとでは、人間と人間との間の社会的関係＝社会的分業の関係は、そのあるがままに物と物の関係＝価値関係として現われ、しかもただ現われるだけでなく実際にそういうものとして妥当し、商品のなかに結晶した人間労働＝商品価値による人間支配が必然となり、またこれによって私的所有および社会的分業の発展が保証されるのである。

以上見たように、私的生産者の労働は、労働そのものとしては私的所有者の私事として営まれるのであるから、各々の私的労働がどれだけの社会的労働を現わすかは、労働過程のなかでは絶対にわからない。私的労働がどれだけの社会的労働を表現するかは、労働が商品の価値として対象化し、商品が交換関係をとり結んだときにはじめて明らかになる。したがって、「価値が私的生産物のうちにふくまれている社会的労働の表現であるということのうちには、すでに、この社会的労働と、その同じ生産物にふくまれている私的労働とのあいだに差異が生じる可能性がふくまれている。だから、ある私的生産者が社会的な生産様式が進歩してゆくのにこれまでどおりの仕方で生産をつづけてゆくなら、彼はこの差異を身にこたえて感じるようになるのである」（『反デューリング論』全集二〇巻三一九頁）

高い労働熟練、およびすぐれた生産諸条件をもつものは、私的労働としてはより少い労働時間が、価値としては、したがって社会的労働としてはより大きいものとして認められ、彼が交換において受け取る生産物量はより大きいものとなる。労働の熟練、生産諸条件の劣ったものについては逆のことが生じる。かくして私的生産者はより多くの交換価値を獲得するために、したがってより少い労働時間をより多くの価値として対象化させるために、労働の熟練を高め、よりすぐれた生産諸条件を採用することを否応なく強制させられるのである。

しかし、以上のような労働時間による価値規定の法則が「競

争の強制法則」として生産者たちに多少とも意識され始めるのは、商品生産の発展そのものが必然的に生み出す特殊な商品、貨幣商品の出現によってである。(1)

(1) 貨幣生成の必然性については、ここでは省かざるをえないが、これについては、久留間鮫造氏の労作『価値形態論と交換過程論』(岩波書店)を参照されたい。

貨幣は、価値の目に見える姿態であり、社会的労働の化身である。貨幣の出現によってこれまでの交換価値をめざしての生産は、貨幣めあての生産になり、直接的交換は、貨幣を媒介とする交換にとって代わられる。貨幣の出現は、社会的分業の発展にきわめて重要な役割を果す。貨幣の出現以前においては、商品交換は場所的に限られた狭い範囲において、したがってまたきわめて限られた特定の人間とのあいだでしか行なわれざるをえなかった。このことは直接的交換ということの内容を考えればおのずから明らかである。直接的交換が成立するためには、交換当時者の生産物が相互に欲望を満すことが必要である。この交換の成立は最初は偶然的であるが、ひとたびそれが成立すると、繰返し規則的に特定の人間と、したがってごく狭い範囲において行なわれるにすぎない。ところが、商品交換が次第に発展し、貨幣が現れるや事情は一変する。直接的交換に代わって貨幣を媒介とする交換が、したがって購買と販売の分離が現われる。貨幣は、すでに述べたごとく価値の目に見える姿態であり直接に社会的労働を表現している。それ故、他のいかなる商品とも交換可能な形態である。商品所有者は、まず自己の商品を貨幣に代える。これが商品の販売であり、商品の最初の姿態変換である。これが無事行なわれるかどうかは、「商品の命がけの飛躍」であるが、しかし無事行なわれるものと前提しよう。最初の商品の姿態変換(販売)W_1-Gは、貨幣所有者の側から見れば$G-W_1$(購買)である。この貨幣所有者が金の所有者でないとすれば、彼が貨幣を所有しているのは、彼が自己の商品を販売した結果であるからW_1-Gは、W_0-G-W_1を終結させる過程である。つぎに、W_1-Gは$G-W_2$によって補われなければならない。しかし、この$G-W_2$はW_1-G-W_3の商品の姿態変換の始まりである。したがって、一商品の姿態変換W_1-G-W_2は他の二つの商品の姿態変換の一部を構成する。以上を図示すればつぎのようになる。

$$W_0-G-W_1$$
$$\searrow$$
$$W_1-G-W_2$$
$$\searrow$$
$$W_2-G-W_3$$

このように商品交換が貨幣に媒介されることによって一商品の姿態変換は他の商品の姿態変換と密接に絡みあい、商品流通を形成するのであるが、この商品流通こそは、直接的生産物交換の個人的、場所的、時間的限界を打ち破り、社会的労働の物

質的代謝を、したがって社会的分業の全範囲を発展させるのである。[2]

（2）「商品流通では商品交換が直接的生産物交換の個人的、および局地的制限を破って人間労働の物質代謝を発展させるのが見られる。他方では、当時者たちによっては制御されえない社会的な自然的関連の一つの全体圏が発展してくる。」（『資本論』全集二三巻一四八頁）

「流通は生産物交換の時間的、場所的、個人的制限を破るのであるが、それは、まさに、生産物交換のうちに存する、自分の労働生産物を交換のために引き渡すことと、それとひきかえに他人の労働生産物を受け取ることとの直接的同一性を、流通が売りと買いとの対立に分裂させることによってである。」（前出一五〇頁）

貨幣の出現はかくして社会的分業の範囲を拡大し、社会的な生産有機体――これは、商品、貨幣によって媒介されているのであるから必然的に「当時者たちによっては制御されえない社会的な自然的関連の一つの全体圏」として現われざるをえない――を広範囲なものとするのであるが、それとともにこれまでの自給自足的な経済がますます破壊され、貨幣めあての生産が支配的になり、生産者たちは貨幣の獲得にもっとも有利な部面に自己の活動を限定するようになり、したがって生産者たちの労働能力の一面的発展が進行せざるをえない。また、他方では、分業圏の範囲が拡大されるにつれて、同業者の数が増大し彼らのあいだの競争が激化する。商品の価値は、彼らの知らないところで同業者全体の競争を通じて決定されるようになり、これは彼らの両極分解を条件づけざるをえない。

以上、分業は私的所有を条件づけ、したがって商品交換に媒介されることによって発展してきたということ、そして、それとともに労働能力の一面的発展が進展するということを見てきた。しかし、分業は、労働能力の一面的発展を推し進めるばかりでなく、同時に精神労働と肉体労働、農業と工業、都市と農村の分離、対立を推し進める。

分業は、特定労働についての熟練、巧妙を高めることによって労働の生産力を増大させ、剰余生産物を形成し、階級支配の基礎をつくりだす。そして、それはまず奴隷制または農奴制を生みだした。[3] 奴隷所有者または封建領主は、生産的労働から解放され、「労働の指揮、国務、司法、科学、芸術などの社会の共同業務にあたるのである」[4]（『反デューリング論』全集二〇巻二九〇頁）

（3）商品が共同体と共同体の接触＝交通から生じたように、奴隷または農奴も本源的には共同体と共同体とのあいだの交通＝戦争から生じる。

「もし人間自身が、土地の有機的付属物として、土地といっしょに征服されるとすれば、人間は生産条件の一つとして一括征服されることになり、こうして奴隷制や農奴制が発生するが、これはあらゆる共同団体の本源的形態をゆがめ、変形させ、そしてそれ自体これらの共同団体の基礎となる」（『経済学批判要綱』Ⅲ四二五頁）

（4）農奴はもちろんのこと独立生産者のばあいにおいても「社会の

共同業務」から排除され、もっぱら生産的労働に釘づけにされているという点においてすでに精神労働と肉体労働の分離が存在しているのである。しかし、奴隷を除けば、農奴、独立生産者のばあいには、物質的生産過程における肉体労働と精神労働の分離は存在しない。

「支配、隷属関係が奴隷制や農奴制などの隷属形態に代わって現われるとすれば形態はより自由になる。というのは、この形態は物的な性質のものであり、形式的には自発的であり、純粋に経済的であるからである。あるいはまた、生産過程における支配、隷属関係が以前の独立性に代って現われる。この独立性は、たとえば自営農民や、国家なり地主なりに生産物地代だけを支払うだけでよかった借地農や農村的家内副業や、独立手工業者の場合に存在したものである。だから、この場合には、生産過程における以前の独立性の喪失があるのであって、支配、隷属関係は、それ自体、資本主義的生産様式の導入の所産なのである」(『。直接的生産過程の諸結果』国民文庫九四頁)

社会的分業の発展は、まず採取産業、農業からの手工業、加工工業の分離として現われる。このことは自明である。というのは、「食料の生産は彼らの生活とあらゆる生産一般との第一の条件なのであるから、この生産に費される労働、つまり最も広い意味での農業労働は、利用できる労働時間が全部直接生産者のための食料の生産に吸収されてしまわなくてもよいように、つまり農業剰余労働したがってまた農業剰余生産物が可能になるように、十分に生産的でなければならないのである。さらに発展すれば、社会の一部分が行なう農業総労働——必要労働と剰余労働——が社会全体のために、したがってまた非農業労働者のためにも、必要な食料を生産するのに十分だということ、したがって農業者と工業者とのあいだのこの大きな分業が可能であり、また同様に農業のうちの食料を生産する人々と原料を生産する人々とのあいだの分業が可能だということ」(『資本論』全集二五巻八二〇頁)だからである。農業からの手工業、加工工業の分離、さらに手工業、加工工業の小さな種や亜種への分離は商工業の中心地(都市)を形成し、それとともに都市が政治、文化、芸術、科学の発展の拠点となる。逆に、農村民はその精神的発展を阻害され、「農村生活の愚昧」を条件づけられる。(5)

都市における商工業の発展は、必然的に封建的な諸関係との、したがって封建領主との対立、抗争となって現われるが、(6)しかし他方では都市と農村の相互依存を発展させ、農業をますます商業的農業へ転化させ、農業の生産力を発展させるとともに、地代を貨幣地代に転化させ、そしてこれは隷農の資本家的借地農業者への転化のための「培養場」を形成するのである。(7)

(5) したがって、都市と農村の分離は農工分離を示すばかりでなく、同時に精神労働と物質的労働の分離でもある。

「物質的労働と精神的労働との最大の分業は、都市と農村の分離である。」(『ドイツ・イデオロギー』合同出版一〇七頁)

(6) もちろん都市と農村の分離、対立は中世に限るものではない。

「都市と農村のあいだの対立は、未開から文明へ、部族制から国

家へ、局地制から民族への移行とともにはじまり、文明の全歴史を今日（反穀物法同盟の）にいたるまで貫通している。」（『ドイツ・イデオロギー』前出一〇七頁）

「すべてのすでに発展していて商品交換に媒介されている分業の基礎は、都市と農村の分離である。社会の全経済史はこの対立の運動に要約されると言うことができるのである」（『資本論』全集二三巻四六二頁）

しかし、都市と農村の分離が、農工分離を基礎として展開されるのは中世以降と思われる。これに対して古代においては都市と農村の分離は精神労働と物質的労働の分離を示すにすぎないといえよう。なお、古代都市と中世都市の相違については大塚久雄氏の『共同体の基礎理論』（岩波書店）、増田四郎氏の『都市』（筑摩書房）に詳しい。

(7) 「貨幣地代とともに、土地の一部を占有し耕作する隷属民と土地所有者とのあいだの伝統的な慣習法的な関係は、必然的に、実定法の定則に従って規定された、純粋な貨幣関係に転化する。したがって耕作する占有者は事実上単なる借地農業者になる。この転化は、一方では、その他の一般的な生産関係が適当であれば、旧来の農民的占有者をだんだん収奪して資本家的借地農業者をそれに代わらせるために、利用される。他方では、この転化は、従来の占有者が自分の地代支払義務を買いもどして、自分が耕す土地の完全な所有権をもつ独立農民に転化するという結果に至らせる。現物地代の貨幣地代への転化は、さらに無産の、貨幣で雇われる日雇労働者階級の形成を必然的に伴うだけではなく、これによって先行されさえする。それゆえ、この新たな階級がただ散在的にしか現われていないその発生期には、いくらかましな状態にあった地代負担農民のあいだでは、ちょうどすでに封建時代にもいくらか資産のある隷属農民は彼ら自身もまた隷農を保有していたように、自分の計算で農村賃銀労働者を搾取する慣習が必然的に発展したのである。こうして、彼らのあいだでは、いくらかの財産をかき集めて自分自身を将来の資本家に転化させる可能性がだんだん発展していく。こうして、古くからの自分で労働する土地占有者たち自身のあいだに資本家的借地農業者の培養場ができあがるのであるが、その発展は農村の外の資本主義的生産の一般的発展を条件としているのであって、一六世紀のイギリスで当時の貨幣の累進的な減価が伝来の長期借地契約のもとで土地所有者を犠牲にして借地農業者の富をふやしたように、この培養場が特別に有利な事情に助けられる場合には、特に急速に発展するのである。」（『資本論』全集二五巻一〇二三～一〇二四頁）

さて、以上からつぎの結論をひき出すことができよう。

まず第一に、分業は、私的所有を生みだし、私的所有のもとで、したがって商品交換、商品流通に媒介されることによって発展してきたということ、そしてかかる形態での分業の発展は、必然的に生産者の活動領域を狭め、彼らの労働能力の一面的発展を促さずにはおかないこと、しかし、この過程は同時に私的生産者の競争を激化させ、彼らの両極分解を促し、資本主義的生産様式への道を切り開くものであるということ、第二に以上のような分業の発展過程は、農業、採取産業からの手工業、加工工業の分離として、したがって都市と農村の対立と相

互依存の発展という形で現われ、これは一方では都市に対する封建的な規制を打ち破り、商工業の一層の発展、したがって工業の資本主義化を促すとともに、他方では農業の資本主義化を促し、またこれによって農村民を土地から切り離し、資本主義の大規模な発展のための諸条件を準備したということ、である。(8)

(8) いうまでもなく資本主義的生産様式の固有の発展領域は工業にあり、そこにおいて大規模な発展が行なわれるのであるが、しかしそのためには二重の意味での自由な労働者の存在を前提する。これは、農業における資本主義のある程度の発展によって供給されうる。もちろん、それが大規模に供給されるのは、本源的蓄積によってであるが、しかし本源的蓄積が行なわれるためにも、農業におけるある程度の資本主義の発展が必要なのである。

四　資本主義的生産と分業

(1) マニュファクチュアと分業

われわれは、これまで社会的分業は私的所有のもとでのみ、したがって商品交換によって媒介されることによってのみ広範に発展してきたということ、そして社会的分業の発展とともに個々の生産者はますます狭い活動領域に封じこめられ、その労働能力を一面的にしか発展させることができなかったということ、しかし他方では、商品生産の発展、したがってまた社会的分業の発展は、次第に私的生産者間の競争を激化させ、私的所有者の両極分解を促し、一方に生産手段の集積を、他方に「二重の意味での自由な労働者」を形成せざるをえないということを見てきた。そして、実にこの「二重の意味での自由な労働者」こそその労働能力を全面的に発展させられる機会を与えられ、そして究極的にはすべての人間をして全面的に発達した労働力の担い手に仕立てあげるための唯一の主体的勢力になりうるのである。彼らが全面的に発達した労働力になりうるということは、「二重の意味での自由な」という概念から必然的に導き出されうる。「二重の意味での自由な」というのは、いうまでもなく、一つは彼らが生産手段から自由であるということ、すなわち、これまでの私的生産者のように特定の生産手段に緊縛されていないということ、もう一つは彼らがいっさいの人身的な隷属から自由であるということ、つまり、自己の労働能力をどのように処分するかは彼らの自由であるということである。彼らは無所有であるから自分自身で生産を営み、それによって生存を維持していくことはもちろんできない。彼らが生存していくことのできる唯一の方法は、自分の労働力を生産手段の所有者たる資本家に販売することによってである。彼らは、自分の労働力を資本家に販売することを経済的に強制されているわけであるが、しかし、彼らがその労働力をどの資本家に販売するかは彼らの自由である。もちろん、この自由は、法的、形式的なものであって、彼らが自分の望みどおりに、自分の好みに応じて職業を選択できるという性質のものでは全然ない。彼らがどの産業部面に従事するかは、彼らの意志にではなく、その時

時の労働市場の状況によって決定されているのである。しかし、それはともかく、労働者が生産手段から解放され、特定の主人に属さず、形式的にではあるが、自己の労働力の販売の選択権をもっているということは、すでにそのことのうちに全面的に発達した労働力になりうるという可能性を与えられているのである。(9)

(9) 「賃銀労働者の目的は賃銀であり貨幣であり一定量の交換価値であって、そこには使用価値のあらゆる特殊性は消し去られているのだから、彼は彼の労働の内容には、したがって彼の活動の特殊な様式にも、まったく無頓着なのであるが、他方、この活動は、同職組合制度や世襲身分制度のもとでは職務とみなされ、奴隷の場合には、役畜の場合のように、ただ、一定の、彼に押しつけられ伝えられた、活動の仕方、すなわち彼の労働能力の実証の仕方でしかないのである。それだから、分業が労働能力を一面的にしてしまわないかぎり、原則的には、自由な労働者は、彼の労働能力および労働活動の変化がより高い賃銀を約束する場合には、どんな変化をも受け入れることができるし、またその用意をしているのである（じっさい、絶えず都市に移って行く農村過剰人口の場合に、それが見られるように）。発達した労働者はこの変化に多かれ少なかれ適応できないとしても、彼は新しい労働者には常にこの変化の可能性が開かれていると考える。そして、新たに成長しつつある労働者世代は、新たな労働部門や特別に繁栄している労働部門にとっては、常に配分が可能であり自由な利用が可能なのである。（『直接的生産過程の諸結果』国民文庫一〇二頁）

以上、「二重の意味での自由な労働者」という言葉の内容を吟味することによって、そこから必然的に全面的に発達した労働者が生まれざるをえないということを導き出してきたが、しかしこれは、ただ抽象的、論理的にのみそのように言いうるのであって、資本制的生産様式の発生とともにただちにかかる「二重の意味での自由な労働者」が現実に形成されるわけではない。「二重の意味での自由な労働者」が、その概念に純粋に照応したものとして現われるのは、資本主義生産様式が完全に成熟する機械制大工業の段階においてである。資本主義的生産が伝来の生産方法、すなわち手工業的生産に依存するかぎりは、旧来の諸傾向が、つまり分業への固定的な隷属が支配的なのである。

周知のごとく、資本主義的生産は、単純な協業をもって始まる。単純な協業というのは、資本家がこれまでの独立生産者を同じ作業場に集め、同じ作業をさせるという協業のもっとも単純な形態である。個々の労働者の作業方法、労働手段は、かつての独立生産者であったときとまったく変らず手工的方法であり、手工的道具である。だが、この単純な協業は「資本主義的生産様式のある特別な発展期の固定的な特徴的な形態をなすものではない。」（『資本論』全集二三巻四三九頁）それは、ただちに発展をとげて、分業にもとづく協業、すなわちマニュファクチュア的分業が現われる。(10)

(10) すでに前編で述べたように、協業においては、ちょうどオーケ

ストラにおいて指揮者が必要であるように、多かれ少なかれ指揮、媒介の機能を必要とするのであり、その意味で肉体労働と精神労働の分業が存在するのであるが、しかし資本主義的生産様式のもとでは、この指揮、媒介の機能は社会的労働過程の本性から必要であるばかりでなく、この社会的労働過程が同時に資本の価値増殖過程でなければならぬという点からも必要なのである。それゆえ、この機能は資本家の専有の機能として固定化し、労働者に対する専制支配として現われる。

マニュファクチュア的分業においてまず注意すべきは、それが依然として手工業を基礎としていること、したがって生産過程の特殊的諸段階への分解は、これまでの手工的活動をさまざまな部分作業に分解することとまったく一致しているということである。手工業を基礎としているが故に、生産過程の特殊的諸段階への分解は、労働者の手工的熟練によって制約されており、したがってそれは真に科学的な分解を排除するのである。マニュファクチュア的分業は、二重の仕方で発生する。その第一の方法は、さまざまな自立的手工業者たちが同じ資本の指揮のもとで一個の作業に結合される場合に生ずる仕方である。たとえば、客馬車生産においては、車工、馬具工、指物工、ペンキ工等々が必要である。以前においては、これらの労働者は、客馬車生産のためにだけではなく、その他の種々の生産に参加していたのであるが、それが今では客馬車生産のためにのみその労働を充用させられ、したがってこれらの労働者は「自分の従来の手工業をその全範囲にわたって営む習慣といっしょに、そうする能力をだんだん失ってくる。他方、彼の一面化された動作は、いまでは、狭められた活動範囲のための最も合目的な形態を与えられる」（『資本論』全集二三巻四四二頁）のである。マニュファクチュア的分業のもう一つの発生方法は、同じ資本によって同じ作業場で同一の作業をする単純な協業から発生する場合である。単純な協業をしているうちにその労働が分割され、各労働者は分割されたある細目労働のみを専門的に担当するようになる。このようにマニュファクチュア的分業は二重の仕方で発生するのであるが、しかしその最終的姿態はいずれも同じものである。各労働者は、きわめて細分化された部分作業のみを担当させられ、したがってその部分作業についてはきわめて高い熟練、巧妙、敏速、確実さを発揮し、他方ではその部分作業に適合した諸道具を生みだすことによって生産力を高めるのであるが、しかしそれ故に他のすべての諸能力の発展が犠牲にされ、精神的な愚鈍化と肉体的な不具化が生ぜざるをえないのである。[11] しかしマニュファクチュア的分業によるこの肉体的能力および精神的能力の奇型的発展は、これまで考察してきた私的所有のもとでの社会的分業による労働能力の一面的発展を、作業場内において体系的に再生産したものであり、それを極度に徹底したものにほかならないのである。

（11） マニュファクチュア労働者のある細目労働についての高度の熟練、巧妙、敏速、確実さは、全体機構のなかの一つの特殊器官とし

てのみ意味をもち、他の諸器官を離れてはその熟練、巧妙、確実さは役に立たない。ところが、その全体機構は資本によって形成され、資本家の作業場のなかにしか存在しないのであるから、彼の労働力は資本に売らなければ用をなさない。かくして、マニュファクチュア的分業は、個々の労働者の資本への隷属を深化させるのである。また、マニュファクチュア的分業は精神労働と肉体労働の分離、対立を単純協業に比べて一層深化させる。

「未開人が、あらゆる戦争技術を個人の知能として用いるように、独立の農民や手工業者が小規模ながらも発揮する知識や分別や意志は、今ではもはやただ作業全体のために必要なだけである。生産上の精神的な諸能力が一方の面ではその規模を拡大するが、それは多くの面でそれらがなくなるからである。部分労働者たちが失うものは、彼らに対立して資本のうちに集積される。部分労働者たちにたいして、物質的生産過程の精神的な諸能力を、他人の所有として、また彼らを支配する権力として、対立させるということは、マニュファクチュア的分業の一産物である。この分離過程は、個々の労働者たちにたいして資本家が社会的労働の統一性と意志とを代表している単純な協業に始まる。この過程は、労働者を不具にして部分労働者にしてしまうマニュファクチュアにおいて発展する。」（『資本論』全集二三巻四七三～四七四頁）

つぎにマニュファクチュア的分業と社会的分業の関連について検討しよう。すでにこれまでの考察から明らかなように、マニュファクチュア的分業は社会的分業のある程度の発展を前提し、その基礎のうえにのみ成立する。と同時に、マニュファクチュア的分業は社会的分業を一層促進し、倍化させる。マニュファクチュア的分業は種々の用具を生みだし、したがってこれらの用具を生産する自立的な生産部門が新たに形成される。また、これまで同じ生産者によって営まれていた本業または副業がマニュファクチュア経営によってとらえられ分離が生じ相互に自立化する。さらにこれまでの生産過程が特殊的な諸段階に分解され、その分解された生産段階が独立の産業部門に転化する。なお、ここで注意すべきは、これまでの単純商品生産のもとでの社会的分業と異なって、資本主義的生産のもとでは、社会的分業の発展は各生産過程の社会的結合を形成し、それを強化していくという点である。しかし、この生産過程の社会的結合も、マニュファクチュアの段階では、ごく狭い範囲において特定の主要生産物との関連で、成立するにすぎない。それ故、地域的分業がマニュファクチュアの特色として現われる。(12)

(12)　「特定の生産部門を一国の特定の地域にしばりつける地域的分業は、どんな特殊性でも利用せずにはおかないマニュファクチュア経営によって新なた刺激を与えられる」（『資本論』全集二三巻四六四頁）

「地域的分業、すなわち、個々の地域が一つの生産物の生産に、ときにはその生産物の一種類およびさらには生産物のある部分の生産に、専門化されることである。手工的生産の優勢、多数の小さな企業経営の維持、労働者と土地との結びつきの維持、ある専門への職人の釘付け、――すべてこれらのことは、不可避的にマニュファク

チュアの個々の工業地域への封鎖性を条件づける。ときにはこの地方的封鎖性は、他の世界から完全にきり離れた状態にまでたちいたることがあって、経営主の商人だけが、他の世界と交渉をもつのである。

地域的分業は、わが国の工業の特徴ではなくて、マニュファクチュアの特徴をなすものである。」（レーニン全集三巻四四七～四四八）

また、マニュファクチュアは農業から工業の分離を推し進め、農村のただなかに「非農業的中心地」における文化的および教育的水準は、農村のそれに比較すればはるかに高いことは明らかである。だから、マニュファクチュアは労働者の精神的および肉体的能力を奇型的に発展させるとはいえ、以前の生産様式に比較すれば住民の文化的、教育的水準を高めるのである。(13)

が、この「非農業的中心地」における文化的および教育的水準

(13) 最初マニュファクチュアがつかむのは、いわゆる都市工業ではなく、紡糸や機織のような農村副業、ツフト的熟練や工芸的修業を要することのもっとも少い労働である。マニュファクチュアが国外市場の基地を見いだし、したがっていわば自然生的に交換価値を目ざす生産――したがって直接航海と関連のある造船それ自身等のマニュファクチュア――がおこなわれていた大商業中心地以外ではマニュファクチュアはその最初の居住地を都市に設けないで、農村、非ツンフト的村落等に置いている。農村副業のなかにはマニュファクチュアの広大な基盤がある一方、都市工業は、それが工場的に経営されうるためには生産の高度な発達を必要とする。」（『経済学批判要綱』Ⅲ四四六頁傍点―マルクス）

「マニュファクチァア型に組織された営業は、たいていいのばあい……非農業的中心地をもっている。それは都市であることもあれば農村であることもあるが（このほうがはるかに多い）、そこの住民は農業にはほとんど従事しておらず、そこは商工業的性格の居住地にいれるべきところなのである。」（レーニン全集三巻四四八～四四九頁　傍点―原田）

最後に、マニュファクチュア的分業のもとでの資本、賃労働の対立について検討しよう。

「資本家と賃銀労働者の対立は、資本関係そのものとともに始まる」（『資本論』全集二三巻五五九頁）のであるが、しかし、それはマニュファクチュア時代においては「マニュファクチュアを前提しているもので、マニュファクチュアの存在に向けられるのではない。」（前出五六一頁）そしてこの理由としては、第一に、すでに述べたごとく、マニュファクチュアが労働者をしてある部分労働に固定化させ、それを生涯的職業にさせるということにある。彼らは、部分労働を生涯的職業にすることによって高度の熟練、巧妙、敏速、確実さを獲得するが、この熟練巧妙は「秘伝」としてつぎの世代へ伝えられる。それ故、部分労働への固定化は、職業の世襲化および身分制度をつくりだす傾向をもたざるをえない。第二は、マニュファクチュア労働者がそれに固定される部分労働は、簡単なものもあれば複雑なものもあり、その程度に応じて相異なる訓練を必要とし、したが

ってまたそれに応じて労働者の等級的編成と労賃の諸段階が形成されるということにある。第三は、マニュファクチュアは労働者の高度の熟練、巧妙を必要とするとはいえ、しかし他方では普通の人間ならば誰にでもできる簡単な操作が存在し、それは不熟練労働者の担当するところとなり、したがって第二の労働者の等級的区分と並んで熟練労働者と不熟練労働者の等級的区分が形成されるということ、第四に、マニュファクチュアは旧来の独立生産に比較すれば労働の生産力を飛躍的に向上させるとはいえ、それは依然として「社会的生産をその全範囲においてとらえることも、その根底から変革することもでき」ず「都市手工業と農村の家内工業という幅広い土台の上に経済的な作品としてそびえ立った」（『資本論』全集二三巻四八三頁）ものでしかないこと、それ故マニュファクチュア労働者の多くが完全なプロレタリアでなく、多かれ少なかれ土地を所有していたということ、第五に、マニュファクチュアは、「封建制の解体とともに土地から追い出された農村民のために新しい生産分野を開」き、したがって「就業労働者をいっそう生産的にするという積極面のほうがより多く目だっていた」（『資本論』前出五六二頁）ということである。マニュファクチュアがもつ以上のような諸傾向は、労働者を資本にたいして共通の利害関係で結びつけることを、すなわち彼らを階級として団結させることを防げ、したがって必然的に資本、賃労働の闘争は、マニュファクチュアを前提し、その枠内での闘争に終らざるをえなかったのである。とはいえ、資本に対するマニュファクチュア労働者の闘争は、熟練労働者の優勢によって絶えず資本を悩ませるのである。しかし、マニュファチュアはそれ自身のうちに機械を生みだし、それによって労働者の右の「不従順」を克服するのである。(14)

(14) 機械はマニュファクチュア的分業によってはじめて生みだされることができたのであるが、これについてはつぎの三点からそれを把えることができると思う。

まず第一に、機械は、発動機、伝力機構、道具機の三つの部分から形成されることによって道具から区別されるのであるが、このうち道具機の発展が手工的経営あるいはマニュファクチュア経営から機械経営への移行の出発点となること、ところがこの道具機は、マニュファクチュア労働者の手工的道具が機械的道具として再現したものであるということ、第二は、機械経営はまず紡績機、靴下織機等のいわゆる軽工業部門において発展するのであるが、これらの機械は、マニュファクチュア時代に生みだされた多数の高度の熟練労働者によって形成されることができたということ、第三に、生産過程がマニュファクチュアによって特殊的諸段階に分解されたことによって機械の導入も可能になったということ、である。以上三点についてマルクス、およびレーニンの説明をつぎにかかげておこう。

まず、第一の点について。

「機械のこの部分（道具機―原田）こそは、産業革命が一八世紀にそこから出発するものである。それは、今もなお、手工業経営やマニュファクチュア経営が機械経営に移るたびに、毎日繰返し出発点

となるのである。

そこで、道具機または本来の作業機をもっと詳しく考察するならば、しばしば非常に変化を加えられた形態をもってであるとはいえ、だいたいにおいて、手工業者やマニュファクチュア労働者の作業に用いられる装置や道具が再現するのであるが、しかし、今では人間の道具としてではなく、一つの機構の道具として、または機械的な道具として再現するのである。」(『資本論』前出四八八頁)

第二の点について

「マニュファクチュアの最も完成された姿の一つは、労働用具を生産するための、またことに、すでに充用されていた複雑な機械的装置を生産するための作業場だった。ユアは、次のように言っている。

『このような作業場は、さまざまな度合の分業を示していた。錐やのみや旋盤は、それぞれ、技能の程度に従って等級的に編成された固有の労働者をもっていた。』」(前出四八四頁)

「ミュール紡績機や蒸気機関などは、それらの製造を専業とする労働者がまだいないうちからあったのであって、ちょうど、世のなかに仕立て屋がいないうちから人間は衣服を着ていたようなものである。とはいえ、ヴォーカンソンやアークライトやウォットなどの発明が実用化されることができたのは、ただ、これらの発明家たちの目の前に、マニュファクチュア時代から既成のものとして供給されたかなりの数の熟練した機械労働者があったからにほかならない。」(前出四九八頁)

第三の点について

「資本による生きた労働の領有は、機械装置のばあいには次のような側面からもまた直接的実在性をうけとる。すなわち一方では、機械に、以前には労働者が遂行していたのと同じ労働を遂行する能力を与えるのは、科学から直接生じる分析と化学的諸法則の応用とである。しかし、機械装置のこの道にとっての発展は、大工業がすでに高度の段階に到達し、また諸科学全体が資本に奉仕するとりこになったときに、はじめて始まるのである。他方では現存する機械装置それ自体がすでに大量の資源を供給する。そのさい、発明が一つの商売となり、また直接的生産それ自体への科学の応用が、科学にとり規定的な、またこれを誘引する観点となる。だがこれは、機械装置が大規模に成立したその道ではないし、ましてそれが細部にわたって進歩したその道でもない。この道は—分業による—分析(Analyse)である。そしてこの分業は労働者の作業をますます機械学的作業に転化し、その結果ある一定の点で機械が労働者にかわって登場することができる。」(『経済学批判要綱』Ⅲ六五二〜六五三頁)

「ここでは、ただ機械制大工業への準備段階として分業の必要を解明する、もっと重要な二つの事情を説明しておく。第一に、生産過程がもっとも簡単な、純粋に機械的な多くの作業に分解することによってはじめて機械の導入も可能となる。この機械は、はじめはもっとも簡単な作業に用いられ、漸次的にのみ、より複雑な作業をとらえていくのである。」(レーニン全集三巻四四四頁)

(2) 機械制大工業と分業

すでに述べたように、マニュファクチュア経営から機械経営への移行は、まず道具機の形成によって行われる。このことは

明らかである。というのは、発動機、伝力機構がどのように発展しようとも、道具機が存在しなければ、それ自体生産に役立てようがないからであり、また発動機、伝力機構の変革は、道具機が発展し、それが伝来の動力、伝力機構と矛盾、衝突するに至ったときに現実的な問題として提起されうるからである。しかし、機械経営がマニュファクチュア経営の基礎のうえにではなく、それ自身の基礎のうえに独自の生産様式として確立するのは、発動機＝動力の発展によってである。機械が人力、動物、風、水等の旧来の動力に依存しているあいだは、依然として制限されたものであり、自由に発展することができなかったが、しかし、これまでのありあわせの動力から解放されて新たな動力—蒸気機関—が登場するや否や、機械は自動機械体系として確立し、生産力の飛躍的発展を保証するものとなった。自動機械体系がひとたびある産業部面を把えるならば、それは関連産業部面に波及し、つぎつぎに自動機械体系が採用される。こうして各特殊的生産部面における生産様式が変革され、生産力が飛躍的に向上すれば、それは「社会的生産過程の一般的条件」、すなわち交通＝運輸手段の革命を促す。発展した大工業には、それに照応する運輸＝交通手段の体系—河航蒸気、鉄道、太洋汽船、通信網等—が現われなければならないし、また必然的に現われる。これらの交通＝運輸手段は、大量の鉄を必要とし、それが鍛冶され、切断され、造形されねばならない。これは、もはや小規模な手工的熟練にのみ依存するマニュファクチュア経営によって供給されうるものではない。かくして、機械製作は大工業にとってかわられ、機械による機械の生産が行われ、大工業は「その適当な技術的基盤を創造し、自分の足でたつ」ことになったのである。では、こうした機械制大工業の確立は分業のあり方にいかなる影響を与えるであろうか。以下まずその一般的特徴を考察し、ついで肉体労働と精神労働、都市と農村の分業について考察することにしよう。

1　マニュファクチュアにおいては、すでに考察したように、労働者はある程度の土地を所有し、したがってそれに緊縛されているとともに、他方では多かれ少なかれ身分的な家父長的な支配関係につなぎとめられていたのであるが、機械制大工業は農村から家内副業——紡績業、機織業——を奪いとり、またそれが農業に充用されることによって農村民の多数を土地から切り離し完全なプロレタリアに転落させるとともに、身分的、家父長的な関係を打破し、純粋の金銭関係に変えてしまう。また、機械制大工業は旧来の手工業者、マニュファクチュア経営者の多くを破滅させプロレタリアに転落させるとともに、それが筋力、熟練を不要にすることによって児童、婦人を生産の場面にかりたてる。かくして、機械制大工業は、名実ともに二重の意味での自由な労働者を大量に形成する。彼らは、鳥のごとく自由であり、どの生産部面にも、従事することができ、どんな遠隔地にも出かけていくことが可能である。（そして交通＝運輸手段の発展がこれを現実に可能にする）したが

って、ここにすでに、彼らが一生産部面、または特殊的細目労働に固定されることなく、全面的に発達した労働力の担い手になりうるという可能性が与えられているのである。

2　機械制大工業は協業を労働手段そのものの本性から命ぜられた技術的必然にし、ますますそれを大規模化していくのであるが、この協業は、労働者を細目労働に生涯的に従事させるというマニュファクチュア的分業を技術的に止揚する。マニュファクチュアにおいては、すでに述べたごとく生産過程の特殊的諸段階への分解は、それぞれの諸段階が労働者の部分機能として遂行されるものでなければならず、したがってその分割原理は純粋に主観的であるのにたいして、機械制大工業においては、生産過程が人間に即して分解されるのではなく、それ自体として客観的に考察され、科学的に分解されており、そしてそれぞれの部分機能の遂行および結合は機械学および化学の技術的応用によって解決されている。マニュファクチュア労働者が身につけていた熟練、巧妙、敏速、確実さはすべて機械のものとなってしまい、労働者はもっぱら機械の監視役かあるいは機械に材料を提供することを主たる作業とするにすぎない。したがって、近代的工場（機械体系、すなわち種類を異にする部分機械の編成された体系によって構成されている）内においては、分業はそれぞれの部分機械のあいだへの労働者たちの配分として現われるのであるが、しかしこの労働配分は、同じ労働者を同じ職分に固定化させるという必要を止揚している。というのは、第一に、右に述べたごとく労働者はもっぱら機械の助手として作業するのであるから、どの部分機械に属しようとも労働の差異は殆んど問題にならないからである。つまり、機械制大工業は労働の水準化、均等化をもたらすのである。第二に、機械による労働は短期間に、しかも若い時に習得することが可能であり、したがって特定の労働者を機械労働者として仕立てる必要をなくすからである。第三に、工場の全運動は、労働者から出発するのではなく機械から出発するから、労働過程の中断なしに人員交代が行なわれうるからである。

かくして、機械制大工業のもとでは、マニュファクチュアに見られた労働者の等級的区分にかわって性および年齢別区分が主要なものとして現われる。

3　機械制大工業のきわめて重要な特徴は、それが「一つの生産過程の現存の形態をけっして最終的なものとは見ないし、またそのようなものとしては取り扱わない」（『資本論』前出六三三頁）ということである。旧来の手工業においては、ある労働手段が獲得されるやそれが数世代にわたってそのまま維持され、また変化するとしてもきわめて遅々たる変化であるのにたいして、機械制大工業はひとたびそれが確立するや無限に発展し、旧来の技術、機械は絶えず新たな技術、機械にとって代わられ、また他方では、既存の生産過程は不断に分解され、新たな専門化された自立的な生産部門を形成し、これまでとは比較にならぬ規模で社会的分業を深化、発展させる。したがって、

労働者の社会的結合および労働者の機能もまた絶えず変化し、「労働の転変、機能の流動、労働者の全面的可動性」が不可避となる。それ故、大工業は、「変転する労働要求のための人間の絶対的な利用可能性をもってくることを、すなわち、一つの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人の代わりに、いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行なうような全体的に発達した個人をもってくることを、一つの生死の問題にする」のである。

以上のように、機械制大工業はこれまでの固定的な分業を打破し、否応なく「全体的に発達した個人」を形成せざるをえないが、しかしこの諸契機は、同時にまた資本、賃労働の対立を激化させ、それを真に階級闘争として発展させていく諸契機であることが注意されねばならない。

労働者の土地からの完全な分離、身分的、家父長的な関係の一掃は、資本の労働者にたいする支配の過渡的、古物的形態を一掃し、直接的な公然たる支配にかえ、したがってまた資本にたいする労働者の直接的闘争を一般化させる。協業の大規模化は、労働者の力を増大させ、また労働の水準化、均等化、したがって労働者の等級的区分に代っての性および年齢別の編成は、労働者のあいだの利害対立を取り除き、彼らを資本にたいして共通の利害関係で結びつけ、彼らの団結を、容易にかつ強固にする。機械制大工業の不断の発展は、資本主義的生産様式のもとでは、相対的過剰人口を形成し、それを増加させる過程として進行し、したがって賃銀を絶えず価値以下におしさげざるをえないが、しかしそれ故に、賃銀闘争を資本主義的生産様式そのものに向けた闘争に発展させることが不可避となる。また「労働の転変、機能の流動、労働者の全面的可動性」は、労働者にどの生産部面においても資本の支配が同一であることを認識させとるとともに、他方ではすべての生産部門およびすべての工場における労働者の結束と連帯を促し、「多くの地方的闘争を集中して、一つの全国的闘争、一つの階級闘争」（『共産党宣言』全集四巻四八四頁）へと発展させざるをえない。

さて、以上から、さしあたりつぎの結論を導き出すことができる。

すなわち、機械制大工業はこれまでの固定的な分業を破壊し、「労働の転変、機能の流動、労働者の全面的可動性」を条件づけ、したがってどの生産部面にも従事することができ、どんな生産手段も使いこなすことのできるように人間の能力を発展させるという意味で「全体的に発達した個人」をつくりだすが、しかし、この過程は同時にまた資本、賃労働の対立を階級闘争として発展させる過程であるということ、そしてこの階級闘争を通じて労働者は資本主義的生産の全本質を、すなわち、結合労働の生産力の発展が資本の生産力の発展として現われ、資本の力として労働者に対立し、労働者の貧困と苦痛を条件づけるという資本主義的生産様式のこの矛盾、を認識することができ、したがって「今日の生産力をそれのついに認識された本

性におうじて取り扱う」（『反デューリンゲ論』全集二〇巻二八八頁）ことができ、「生産の体系全体を見とおせる」（『共主義の原理』全集四巻三九三頁）ことのできる主体として成長することができるということ、これである。そして、こうした主体として成長することによってはじめて真に「全体的に発達した個人」と、いうことができるであろう。もちろん、こうした「個人」は、プロレタリアートの一部分のうちに形成されるだけであるということはいうまでもない。

つぎに、肉体労働と精神労働の分業についてであるが、これについてはすでに前編で述べたので、ここでは簡単につぎのことを指摘しておこう。物質的生産過程における肉体労働と精神労働の分離、対立は、資本主義的生産様式の発生とともに始まり機械制大工業の段階において完成するのであるが、しかしこのことは、一部でいわれているように労働者の精神的能力の低下を条件づけるものではないということである。これについては、これまでの叙述からもすでに明らかである。機械制大工業が必然的に要求する「労働の転変、機能の流動、労働者の全面的可動性」、およびこれから不可避的に生ずる生産的労働と教育の結合、さらに階級闘争の発展によって労働者の精神的能力はブルジョアジーのそれに比較すればはるかに高いものとなるのである。そうであればこそ、プロレタリアートはブルジョアジーの「墓掘人」となることができるのであり、ブルジョアジーに代わって「今日の生産力をそれのついに認識された本性において取扱う」ことができるようになるのである。

最後に、都市と農村の分業、対立について。

機械制大工業は、すでに考察したように、旧来の土地所有およびそれについていたところのいっさいの「政治的社会的飾りものや混じりもの」（『資本論』全集二五巻七九六頁）を打破し、農村民の大多数を都市に集中させ、彼らを「農村生活の愚昧からすくいだ」（『共産党宣言』全集四巻四八〇頁）し、他方では農業を「社会の最も未発展な部分の単に経験的な機械的な伝承されたやり方から農学の意識的科学的応用」（『資本論』前出七九六頁）による資本主義的農業へ転化させ、農業生産力を飛躍的に向上させることによってきわめて進歩的革命的役割をはたす。だが、資本主義的農業の発展はけっして都市と農村の対立を解消させない。逆にそれを徹底的に推し進めることによって、その対立の解消をさしせまった課題として提起するのである。

資本主義的生産様式が都市と農村の対立を激化させる要因としては、種々の要因が考えられるが、ここではその主なものとしてつぎの四点をあげておこう。

まず第一は、資本主義的生産様式そのものが土地の性質に適合しないということにある。「農業よりも工業を急速に発展させることは、資本主義的生産の性質上当然のことである。このことは土地の性質から生ずるのではなくて、土地が真にその性質に適合して利用されるためには別の社会的関係が必要である、ということから生ずるのである」（『剰余価値学説史』全集二六

巻Ⅲ二九六頁）

資本主義的生産の規定的動機および直接的目的は、いうまでもなく利潤の追求である。ところで、この利潤の大きさを制約する重要な要因として資本の回転がある。回転が速ければ、それだけ多量の利潤を獲得することができる。しかし、回転は生産期間によって規定されている。生産期間は労働期間と労働休止期間とから成るが、工業においては、労働休止期間は殆んど存在せず、生産期間と労働期間は一致している。しかし「農業では、生産期間と労働期間の相違は特に明瞭に現われる」[15]（『資本論』全集二四巻二九四頁）生産期間が長いこと、しかもその短縮が困難であるということ、このことはそれを資本主義経営にとってきわめて不利な部門たらしめ、したがって農業は工業に比較してその発展が遅れざるをえない。[16][17]

（15）生産期間と労働期間の不一致が、資本主義のもとでは農業労働者の悪化を条件づける基礎となっているということが注意されねばならない。

「生産期間とその一部分でしかない労働期間との不一致が農業と農村の副業との結合の自然的基礎をなしているということ、他方、この副業はまた最初はまず商人としてはいりこんでくる資本家にとっての手がかりになるということである。その後、資本主義的生産が工業と農業の分離を完成するようになると、ますます農村労働者はただ偶然的でしかない副業にたよることとなり、こうして農村労働者の状態はますます悪くなってくる。」（『資本論』前出二九五頁）

（16）この点が特に明瞭に現われるのは森林である。

「特殊な土地生産物の栽培が市場価格の変動に左右されるということ、またこの価格変動につれてこの栽培が絶えず変化するということ、そして資本主義的生産の全精神が直接眼前の金もうけに向けられているということ、このようなことは、互につながっている何代もの人間の恒常的な生活条件の全体をまかなわなければならない農業とは矛盾している。その適切な一例は森林であって、森林は、ただ、それが私的所有ではなくて・国家管理のもとにおかれている場合にだけ全体の利益に適合するように管理されることもあるのである。」（『資本論』全集二五巻七九八頁）

（17）生産期間が長く、自然事情により多く制約されているということと関連して、農業が資本主義の景気循環過程のなかでもっとも激しい動揺にさらされ、したがってきわめて不安定な部門とならざるをえない、ということが指摘されねばならない。

「事の性質上当然のことであるが、植物性および動物性の素材の生成や生産は、ある程度の自然的期間に結びついている一定の有機的諸法則に従わざるをえないので、このような素材は、たとえば機械やその他の固定資本や石炭や鉱石などのようにその増加が—他の自然条件を前提すれば—産業的に発達した国では非常に短い期間に行なわれうるものと同じ度合で急激にふやされることはできない。それゆえ、不変資本のうちで機械などの固定資本から成っている部分の生産や増加が、有機的原料から成っている部分よりもずっと速く進んで、そのためにこの有機的原料にたいする需要が供給よりも速く大きくなり、したがってその価格が上るということは、ありうることであり、また発展した資本主義的生産では避けられないことでさ

えある。この価格上昇は実際には次のようなことを伴う。(1)価格の上昇が運輸費の増大を埋め合せるので、このような原料がいっそう遠方から供給されるということ、(2)このような原料の生産がふやされるということ。しかし、このことは、事柄の性質上、おそらく一年後にはじめて生産物の量を現実にふやすことができるであろう。(3)以前は利用されなかった各種の代用品が利用され、また廃物がいっそう経済的に取り扱われるということ。価格の上昇が生産の拡張や供給に非常に目だって作用しはじめるときには、たいていすでに転回点が現われていて、そうなると、原料やそれを要素とするすべての商品の騰貴がかなり長く続いたために需要は減退ししたがって原料の価格にも反動が現われる」(『資本論』全集二五巻一四九～一五〇頁)

第二は、資本主義的農業の発展は、一定面積を利用するために必要な可変資本を絶対的に減らし、したがって農業人口が絶対的に減少せざるをえない、ということにある。これによって農業プロレタリアは絶えず過剰になり、有利な事情をまちかまえて都市プロレタリアに移行しようとする潜在的過剰人口が形成され、したがって賃銀は絶えずその最低限にまでおしさげられる。これは、農村の低い文化的、教育的水準を条件づける。

また、農村人口の過疎化、都市への人口集中は、大地が原料食料、衣料などのかたちで供給したものを再び大地へ還元することを困難にし、したがって「生命の自然法則によって命ぜられた社会的物質代謝の関連のうちに回復できない裂け目を生じさせるのであって、そのために地力は乱費され、またこの乱費は商業を通じて自国の境界を越えてはるかに遠く運びだされるのである。」(18)(『資本論』全集二五巻一〇四一頁)

(18) 都市による農村からのこのような「搾取」は農学の発展によって解決されうるものではない。

「リービヒは土地からとれるだけのものを土地にかえす必要のあることを証明した。したがって、彼は、都市の汚物を海や川にすてることは、農業にとって必要な物資の無意味で野蛮な略取であると考えた。カウツキーはリービヒと同じ理論をもっている。しかし最新の農学は、厩肥がなくとも人造肥料によって、また窒素を固定させる荳科植物に一定のバクテリヤを付着させること等々によって、土地の生産力を回復させることが完全に可能であることをしめした。したがって、カウツキーやこれらのすべての『正統派』は、時代おくれの人々にすぎない、と。

われわれはこうこたえよう、……。天然肥料を人造肥料によって代替する可能性と、この(部分的な)代替の事実は、自然の肥料や人造肥料をむだにすて、おまけに都市近郊や工場近辺の河川や空気を汚物で混濁させるのは不合理だということを、すこしも反駁するものではない。都市が農村を農学的な意味で搾取しているという事実は現代の農学によって論破されているかのようにいう異議—この異議を批判家たちはなにか目新しいもののようにカウツキーにつきつけているが、ほかならぬこの異議にたいして、カウツキーはその著書の二一一頁でつぎのようにこたえている。人造肥料は『土地の肥沃度の減退を予防することを可能にする。しかし、この人造肥料をしだいに増量しながら使用しなければならないということは、農

業の多くの負担のなかにさらにもう一つの負担があることを意味するにすぎない。そしてこの負担たるや、けっして自然必然的なものでなくて、現存する社会関係から生じるものである。」（レーニン全集五巻一五二頁）

第三は、土地私有の存在である。資本主義的生産様式にとっては土地私有は無用の長物であり、したがって急進的ブルジョアジーはそれを国有の形態に置きかえることを望むが、しかし彼らはそれを実行することはできない。というのは、土地私有にたいする攻撃は他の労働諸条件の私的所有にたいする攻撃をひき起す可能性があるからである。土地私有は、借地農業者に排水溝や灌漑設備や地均しや農場建物などのような借地期間中に完全な還流を期待できない改良や投資を避けさせ、したがって地力の乱費、搾取を促進せざるをえないのである。

第四は、農村でつくられる価値の一部分が、地代、税金、利子等の形態で絶えず都市に流出していくということにある。

以上、資本主義的な農業経営を前提して工業にたいする農業の、したがって都市にたいする農村の後進性、停滞性を条件づける諸要因について述べてきたが、しかし、以上の指摘は、独立自営農民による小規模耕作についても多かれ少なかれ妥当する。今日どの資本主義国においてもかなりの数の独立自営農民が存在しているが、その多くは「過重労働と過少消費」によってかろうじてその存在を維持しているにすぎず、農村のあらゆる面での後進性の大きな原因になっているのである。それゆえこうした自営農民が存在するということ自体、資本主義がいかに農業と工業、農村と都市を対立的な姿態においてしか発展させることができないかということを物語っているといえよう。

五、社会主義社会における「分業廃棄」の若干の基本的方策について

ここで社会主義社会というのは、プロレタリアートが権力を樹立してから共産主義社会の高い段階に到るまでの全過程をいう。(19)

(19) マルクス主義の終局目標が高い段階の共産主義社会の建設にあれば、右の社会主義社会の全過程は過渡的な社会＝過渡期と見なされるのは当然である。マルクスは、周知のように『ゴーター綱領批判』で共産主義社会へ到る基本的道筋を明らかにし、それを二つの段階、すなわち低い段階と高い段階に分けた。しかし、その後の世界史の発展は、マルクスのいうような共産主義の低い段階＝社会主義社会にただちに到達するものではなく、それに到るまでにかなり長期の過渡期（狭い意味での）を要することが明らかとなった。そしてまた、それにともなって国際共産主義運動のなかでこの過渡期の把え方について激烈な論争が引き起されるに至った。これについてここで詳論する余裕はないが、さしあたりつぎの点を指摘しておこう。まずこの問題が、そもそも重要な問題として提起されたのは、けっして単なる理論上の問題ではなく、すぐれて実践的な問題であったということ、すなわちプロレタリアート独裁を維持、強化していくのかそれともそれを解消するかという問題と密接に結びつ

いていたということである。それ故、いわゆる「過渡期」の問題はかかる視点から把える必要があるのである。これについてはのソビエトの見解は生産関係の社会主義的改造、すなわち全人民的所有と集団所有の確立によってマルクスのいう共産主義社会の低い段階に到達したとし、プロレタリアート独裁はもはや必要でなくなったとすることにあった。全人民的所有および集団所有の確立は、社会主義建設の過程において一つの重要な画期をなすものであるが、しかしこのことは決してプロレタリアート独裁の解消を条件づけるものではない。マルクスは、プロレタリアート独裁についてつぎのように述べている。

「この革命的社会主義の主張するところは革命の永続宣言であり、かつまた階級の差別一般の廃止に、階級の差別の基礎となっている全生産関係の廃止に、これらの生産関係に照応するいっさいの社会関係の廃止に、およびそれらの社会関係から生じるすべての観念の変革に、達するための必然的な過渡期としてのプロレタリアートの階級独裁である。」(『フランスにおける階級闘争』国民文庫一四三頁)

そして、共産主義の低い段階は、「経済的にも道徳的にも精神的にも旧来の社会の母斑をまだおびている」(全集一九巻二〇頁)社会なのである。さらに、この社会は「旧来の社会の母斑をまだおびている」とはいえ、所有はすべて単一の社会的所有になっているのであり、したがってソビエトはまだマルクスのいうこの低い段階の共産主義にすら到達していないのである。

なお、右と関連してわが国の社会主義経済学の代表的理論家の一人でいられる長砂氏の主張について是非一言しておかねばならない。

氏の主張は、複雑かつ難解であって、それを要約して提示することはなはだ困難なのであるが、おおよそつぎのように要約することができよう。すなわち、マルクスのいう共産主義の低い段階は、「純粋社会主義社会」＝「生産手段の単一の社会的所有の支配、搾取階級の廃絶にとどまらないあらゆる階級的差異の消滅、非商品生産、貨幣の消滅、労働に応じた配分などがすべて完成している」(『社会主義経済法則論』青木書店二三三頁　傍点―原田)社会であるが、しかし社会主義社会の「基本的特徴」は「生産手段の共同所有と各人の労働に応じた生産物の分配」(二三四頁)であるから、「現実の社会主義諸国おいて」はすべて、右の「純粋社会主義の諸要素は、未成熟ではあれ、基本的に実現されているのである」(二三四頁)と。つまり、「現実の社会主義諸国」は、「生産手段の共同所有(これは単一の社会的所有ではなく集団所有も含む―原田)と労働に応じた配分」が行なわれているから「生産手段の単一の社会的所有の支配、搾取階級の廃絶にとどまらないあらゆる階級的差異の消滅、非商品生産、貨幣の消滅、労働に応じた分配」が「未成熟ではあれ、基本的に実現されている」というわけである。二つの形態の社会的所有と「労働に応じた配分」がどうして「単一の社会的所有の支配」や「搾取階級の廃絶にとどまらないあらゆる階級的差異の消滅」を「基本的に実現」しているということを意味するのであろうか。これを理解しうるのは、もちろん長砂氏だけであろう。また、氏は、マルクスが共産主義の低い段階において「搾取階級の廃絶にとどまらないあらゆる階級的差異の消滅」を主張しているといわれるが、この段階においてすでに肉体労働と精神労働、都

市と農村の「差異」も「消滅」するといわれるのであろうか。氏もあえてそうは主張されないと思うが、ならばこのような「差異」は一体どういう「差異」を現わすのであろうか。氏の主張はレーニンの「階級の廃絶」についての規定（本稿前編二〇八頁参照）を踏みにじるものであるといわなければならない。このほかにも氏の著書にはいたるところに混乱と矛盾が発見されるのであるが、それらについてはいずれ別稿で改めて検討することにしたい。

われわれは前節で、プロレタリアートは階級闘争によって今日の生産力の本性を認識することができ、したがってそれを認識された本性に応じて取扱うことのできる主体として成長することができるということを強調してきたが、彼らが現実にそうした主体になりうるのは、いうまでもなく階級闘争に勝利することによって、つまり政治権力の奪取＝プロレタリアート独裁の樹立によってである。彼らは自己の政治権力を樹立することによって資本家階級から生産手段を収奪し、それを彼らの共同の管理下におき、それによってはじめて彼らに対立し、彼らを支配してきたところの生産力をその認識された本性にしたがって取扱うことが可能となる。それ故、プロレアートの独裁および生産手段の社会的所有への移行は、社会的生産をプロレタリアートが直接にその意識的な統制下においたということを意味するのであって、その意味では肉体労働と精神労働の分業＝対立は基本的に消滅したということができよう。しかし、これは階級としてそうなっているのであって個々のプロレタリアート

にとってそうであるのではない。プロレタリアートの独裁が樹立され生産手段の社会的所有への移行が首尾よく実現されたとしても、すべてのプロレタリアが国家の統治に自主的に参加しうるわけではなく、また社会的生産を自覚的に管理する能力をもつまでに至ってない、ということは明らかである。そうした自覚、能力、規律を備えているのはプロレタリアートのなかの一部分＝先進分子だけである。

「プロレタリアートの独裁とは、このラテン語の科学的・歴史的＝哲学的表現を、もっとも簡単な言葉に翻訳すれば、ちょうどつぎのことを意味する。

ただ特定の階級、すなわち都市の労働者、一般に工業労働者、工場労働者だけが、資本くびきを打倒する闘争で、この打倒そのものの過程で、勝利を維持強化するための闘争で、新しい社会主義的生産組織を創設する事業で、階級の完全な廃絶のための闘争全体で、勤労被搾取者の全大衆を指導することができる」（レーニン全集二九巻四二四頁、傍点―原田）

他の圧倒的多数のプロレタリアは右のような自覚、規律、能力を備えていない。さらにそのほかに、種々のブルジョア専門家、官吏、官僚がいる。彼らの多くが国家機構の重要な分野に入りこみ、「社会的生産の体制」のなかで特殊な地位を占めるのは避けがたい。なぜなら「資本主義がつくりだした人的資材によるほかに、共産主義を建設する手はないからである。なぜなら、ブルジョア・インテリゲンチツィアを放逐し、ほろぼし

てしまうことはできるものではなく、彼らに打ち勝ち、彼らをつくりかえ、彼らを同化し、彼らを教育しなおさなければならないからである。それはちょうど、プロレタリア自身をも、長い闘争のなかで、プロレタリアートの独裁を基盤として、教育しなおさなければならないのと同じことである。……ソヴェト技師、ソヴェト教師、ソヴェトの工場で働いている特権的な、すなわちもっとも熟練した、もっとも地位の高い労働者の内部では、……断然すべての否定的な特徴がたえず復活しているのを見うけるが、われわれは、プロレタリア的な組織と規律をもって、繰りかえし、うまずたゆまず、長期にわたり、頑強にたたかうことによってはじめて、この害悪を――徐々に――征服するのである。」(前出三一巻一〇四～一〇五頁)

右のレーニンの叙述から明らかなように、プロレタリアート独裁の樹立、社会的所有への移行が完了しても精神労働と肉体労働の対立は依然として存在しており、そしてそれは資本主義生産が長期にわたってつくりだしたものにほかならないのである。これは、まさしく「プロレタリア的な組織と規律とをもって、繰りかえし、うまずたゆまず、長期にわたり、頑強にたたかうことによって」克服されるのである。したがってプロレタリアート独裁の樹立、社会的所有への移行は「階級闘争の廃止ではなく、ちがった環境のなかで、ちがった形態で、ちがった手段」(前出二九巻四二五頁)での階級闘争の継続なのである。そして、この階級闘争をつうじてこれまで分業に固定的に隷属させられていたところの全勤労大衆を解き放し、彼らを国家の統治に参加させ、社会的生産を自主的に管理するための能力を高めることができるのである。[20]

(20) 「この共産主義的自覚の大規模な産出のためにも、また目的とすることそのものの達成のためにも、大量の人間たちの変化が必要である。そして、こうした変化は、たたなんらかの実践的運動、なんらかの革命においてのみ、おこりうることである。したがって、革命は、支配階級が他のどんな仕方によっても打倒されえないことからだけ必要なのではなく、打倒する階級が、革命においてはじめてのふるい身の汚れをぬぐいおとして、社会のあたらしい基礎をつくる力を身につけるところへ達しうるからこそ必要なのである」(『ドイツ・イデオロギー』前出七九頁)

レーニンは、社会主義社会についてつぎのように述べている。

「社会主義をなにかある死んだ、硬化した、一度あたえられればそれきりのものと考えるありきたりのブルジョア的観念は、際限もなく誤っていることを理解することがたいせつである。ところが実際には、社会主義からはじめて社会生活と個人生活のすべての分野で、住民の大多数が参加して行なわれる急速な、ほんとうの、真に大衆的な運動がはじまるのである。」(全集二五巻五一〇頁)

「社会主義は、競争の火を消さないばかりでなく、反対に、これを真にひろく、真に大衆的な規模で応用し、勤労者の大多

数をつぎのような活動舞台に実際にひきいれて、彼らがここで自分の本領を発揮し、その能力をのばし、まだ一度もくみだしたことのない泉として人民のなかにひそんでいるところの、天分を発揮する可能性をはじめてつくりだすのである。」（前出二六巻四一五頁）

「ブルジョアジーが社会主義についてこのんで言いふらしているたわ言の一つとしてまるで社会主義が競争の意義を否定しているかのように言うことがある。ところが、実際には、社会主義だけが、階級をなくししたがってまた大衆の奴隷化をなくし、はじめて真に大衆的な規模での競争のための道をきりひらく。またソヴェト組織こそ、ブルジョア共和制の形式的な民主主義をやめ勤労大衆を実際に、管理に参加させるようになり、そのことによってはじめて競争を広範に展開させるのである。これを政治の分野でやることは、経済の分野でやることよりもはるかに容易である。しかし、社会主義の成功のためには後者こそ重要である。[21]」（前出二七巻二六二頁）

(21) レーニンのこの文章から、「社会主義の成功のためには」、政治よりも経済が「重要」である、すなわち「経済が政治にたいして優位を占める」という結論を導きだすならばはなはだしい誤りを犯すことになるであろう。ここで、レーニンは、競争を「政治の分野で」、「広範に展開する」よりも「経済の分野」で「広範に展開する」ほうが困難であり、「重要」であると述べていのであって、「政治」よりも経済のほうが「重要」であるといっているのではない。この点については行論で展開されるはずであるが、念のため注意しておくしだいである。

右のレーニンの説明は、一見自明のことを述べているかに思われるが、しかしここに、社会主義社会のもっとも重要な内容が、いわば社会主義社会の本質規定ともいうべきものが表現されている、と言ってもけっして過言ではないであろう。プロレタリアートの独裁、生産手段の社会的所有は、「社会生活と個人生活のすべての分野」で、「政治の分野」においても「経済の分野」においても、「全住民が参加して行なわれる急速な、ほんとうの真に大衆的な運動」――これこそ「ちがった環境のなかで、ちがった形態で、ちがった手段」での階級闘争にほかならない――を組織し、「まだ一度もくみだしたことのない泉として人民のなかにひそんでいるところの、そして資本主義が幾千幾百万となくもみくちゃにし、おしつぶし、しめころしてきたところの、天分を発揮する可能性をつくりだす」ための基本的な前提にほかならないのである。それ故、プロレタリアート独裁がプロレタリアート独裁であるのは、社会的所有が真に社会的所有であるのは、「ほんとうの真に大衆的な運動」をすべての分野において組織し、それによって彼らが「自分の本領を発揮し、その能力をのばす」機会を与えるかぎりにおいてである、といってもさしつかえないであろう。[22][23] すべての勤労大衆は、この「ほんとうの真に大衆的な運動」の不断の継続のなかで今日の生産力＝機械制大工業が不可避的に要求する規律を、

強制された規律としてではなく結合労働力の一員としての自覚的な規律に転化させ――このことが「今日の生産力をその認識された本性に応じて取り扱う」ということの基本的内容にほかならないのである――この規律の基礎の上にすべての勤労大衆があらゆる面において積極性、創意、工夫を発揮することが、つまり各人がもっている労働能力を全面的に発展させることが可能となるのである。そして、右のような自覚的な労働規律＝「共産主義的な社会的労働組織」（前出二九巻四二四頁）が真に不敗のものとして発展してゆくにしたがって、すなわち「社会の全成員、すくなくともその圧倒的多数が、自分で国家を統治することをまなび」、「すべての人が社会的生産を自主的に管理することをまなび」（前出二五巻五一二頁）ぶにしたがって、分業への隷属もいっさい廃棄され、全面的に発展した人間が形成されるのである。

（22）それ故、たとえば今日のソヴェトの評価において「生産手段の社会的所有が確認されているから、あらゆる搾取が廃絶され、したがって種々の問題はあっても、純粋社会主義国としての基本的特徴をそなえている」といったような主張がもし存在するとすれば、それはきわめて皮相な、トウトロギー的主張でしかないであろう。もちろん、所有が真に社会的な所有であるならば、社会主義国であるにはちがいないが、しかし、所有の内容がいかなる性質なものであるかは、けっして法的、形式的な面から判断をくだすことはできない。マルクスは、所有についてつぎのように述べている。

「所有は、それぞれの歴史的時代に、それぞれ別様に、しかも全然異なる一連の社会的諸関係のなかで発展してきた。ブルジョア的所有に定義をくだすことは、ブルジョア的生産の社会的諸関係のすべてを説明することにほかならない。」（『哲学の貧困』全集四巻一七二頁）

社会的な所有についても同様であって、それが真に社会的所有であるか否かは、当該国の「生産の社会的諸関係のすべてを説明する」ことによって把えられるのである。形式は社会的所有であっても、右に見たような「大衆的な運動」が正しく組織され、発展させられなければ、それは一部指導者の私的利益の追求の手段となり、したがって搾取が行なわれることもりっぱに可能なのである。

（23）今日、中国において「抓革命、促生産」、すなわち「革命に力をいれ、生産をうながす」が、社会主義建設の主要なスローガンとなっているが、これは、レーニンの社会主義の本質規定を的確に把え、それを見事に要約して表現したものといえよう。

以上要するに、「分業を廃棄」するには、まずもってすべての社会成員が結合労働力の一分子としての自覚的な規律を身につけること、しかしそれは「天から降ってくるものでなく、善意の願望から生まれてくるものでな」（前出二九巻四二四頁）く、大衆的な運動をつうじて生まれてくるものであるということ、である。これを基本として、生産的労働と教育の結合を推しすすめること、また、これはすでにこれまでの叙述のなかに含まれていることであるが、肉体労働者の、文化的技術的水準を高める一方、他方では、条件が整しいだい旧来のブルジョア

専門家、技術者、官僚を肉体労働に参加させ、彼らの世界観の改造に努めなければならない。

つぎに、都市と農村の分業の廃棄について。

これも精神労働と肉体労働の分業と同様、商品生産、資本主義生産が残した遺物であり、これを解決するにはきわめて長期の過程を要するが、しかし社会的所有（すでに述べたように、農業においては、どの国においても小所有がかなり広範に残存しており、したがってその場合には、すぐに全人民的な所有に移行することができず集団所有の形態をとらざるをえないのであるが）が実現され、さきに述べたような「大衆的な運動」をつうじて農村民の自覚を高めることができるならば、特に困難な問題はない。農業の機械化、合理化を推し進め、農業労働の生産力を工業と同じ水準に高めなければならないことはもちろんのことであるが、しかし、ここで注意すべきは、農業労働の生産力を高めるだけでは、都市と農村の分業は消滅しないということである。むしろ、逆にそれを拡大する恐れもあるのである。肉体労働と精神労働の差異は、それを消滅してしまうことはできない――肉体労働者と精神労働者の差異は消滅してしまうことはできるし、またしなければならぬ――が、都市と農村の差異＝分離はそれを消滅してしまわなければならない。[24]また、これを消滅することによってはじめて分業へのいっさいの隷属も完全に廃棄することができる。

すでに述べたように、農業労働の生産力の向上は、それ自体を追求するならば、農業人口を絶対的に減少させ、農村人口の稀薄化と都市への過度の人口集中をもたらし、そしてこれは自然と人間のあいだの物質的代謝を破壊し、農業労働者の精神的能力の発展を阻害する。第二は、農業の機械化は、それがどんなに進展しても、農業の特殊性のために工業と同様の性格を、すなわち工業のもつ斉一性、規律性を、もたないということである。[25]そして、これらは農業労働者を自覚的な規律をそなえた生産の体系全体を見とおせる共産主義的人間に育てあげるための重要な障害とならざるをえない。

それ故、都市と農村の分業＝分離を廃棄することは、共産主義社会建設のための不可欠の要件であり、そのためには、農業の機械化、合理化を追求すると同時に、他方では大工業を全国に均等に分布し、すべての社会成員が農業と工業の双方に参加しうる条件を整えなければならない。

(24) スターリンは、「都市と農村の対立」および「両者のあいだの諸相違を一掃する問題」（『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』国民文庫、三三頁傍点―原田）についてつぎのように述べている。

「大都市は死滅しないばかりか、またさらに新しい大都市が、文化の最大の発達の中心地として、また大工業の中心地としてだけではなく、農業生産物の加工や食料品工業のすべての諸部門の強力な発展の中心地としても、あらわれてくるであろう。この事情は、国の文化的繁栄を容易にし、都市と農村における日常生活の諸条件の

均等化にみちびくことであろう。」（前出三四頁）

見られるように、「大都市は死滅」せず「さらに新しい大都市」が「文化の最大の発達の中心地」および「大工業」、種々の「加工工業」の「強力な発展の中心地」として「あらわれてくる」ということが指摘されており、そして「都市と農村の諸相違を一掃する問題」は、「都市と農村における日常生活の諸条件の均等化」におかれている。つまり、スタリーンに従えば、「都市と農村の諸相違を一掃する問題」は、都市の文化、都市の工業を、都市の労働者階級の援助によって農村民がそれを享受するということにおかれているわけである。しかし、これでは農村民はいつまでたっても文化の発展および大工業の建設の直接の担い手になることはできず、「都市と農村の諸相違」は永遠に残り、農村民はいつまでたっても都市労働者の後を追いかけるということになるであろう。もちろん、大都市を消滅するには長期の時間がかかり、その間都市労働者による農村への政治、経済、文化のあらゆる面での援助が必要であることは論をまたない。ましてやソビエトのように、―たとえばシベリア地方に見られるように―工業が比較的未発展な状態から出発した場合には、都市の死滅どころか、新たな工業中心地＝都市の形成さえも必要であろう。しかし、「都市と農村の諸相違を一掃する問題」は、都市労働者による農村の支援の問題に解消することはできない。これは、「対立」を廃絶したにすぎず、「諸相違を一掃」したことにはならない。「諸相違の一掃」はエンゲルスの云うように「都市と農村の分離を廃止する」（『反デューリンゲ論』全集二〇巻三〇五頁）というように理解しなければならないであろう。この点で、現在の中国の工業建設は、きわめて教訓的である。

周知のように、プロレタリア文化大革命のなかで、もっぱら都市の大型企業の建設のみを追求し、中小型企業を切り捨てるか、それとも両者の同時建設を追求するかが重要な問題となり、現在では後者の方向がとられているが、これは都市と農村、肉体労働と精神労働の分業の廃棄という点から見ても、貴重な意味をもっており、科学的経済理論を確実に学びとり、それを中国の現状に正しく適用したものといえよう。『人民日報』の論文は、「同時建設」の意義についてつぎのように述べている。

「中・小型企業を多く建設し、現地の具体的情況にあわせて、小型の鉄鋼工場、化学肥料工場、炭鉱、発電所、セメント工場など地方工業を建設し、専区、県以下の農、副業産物の加工工業、農業機械製造、修理工業を発展させれば、工業を農業に接近させ、いっそうよく農業生産に奉仕させ、農業機械化の発展を推進することができる。これと同時に、農村の労働を十分に利用し、人民公社、生産隊の蓄積と公社員の収入を増やすことができ、集団経済の強化と労農同盟の強化にも役立つのである。中・小型企業を多くつくれば、へんぴな地区や少数民族地区の生産発展を促し、その経済的に立ちおくれた様相を急速に改めることができる。これらの地区の経済が立ちおくれているため、最初から大型経済を設置するのはいろいろな困難をともなってくる。しかし、かれらは自己の必要にもとづいて、自分の力で若干の中小型企業を発展させる可能性も、条件も完全にもっている。こうした基礎ができれば、ひきつづき前進することがかなり容易になってくる。

同時にまた、中・小型企業の大量建設とその分散配置は、戦争に備えるための必要に合致している。また長い目でみれば、労農の結

合、都市と農村の結合に役立ち、三大差異（労働者と農民、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の間の差異）を消滅するための条件をつくりだすこともできる」（一九七〇・八・二四　邦訳『中国の社会主義工業建設』一八一頁）

(25)「実際のところ、これらすべての標識は、農業がまだ、マルクスのいう意味で真の『機械制大工業』の段階に到達していないことを証明している。農業においては、一つの生産機構のうちにむすびあわされた『機械の体系』はまだ存在しないのである。

もちろん、この比較を誇張してはならない。すなわち、一方では、絶対に除去できない農業の特殊性がある（実験室での蛋白質や食料品の製造という、あまりにも先のことであまりにもおぼつかない可能性はひとまずのけるとしても）。そういう特殊性のために機械制大工業は、それが工業でもっているすべての特徴を農業においてもつことはけっしてないであろう。」（レーニン全集第五巻一三六頁傍点―原田）

六　要　約

われわれは、山内氏の所論を手がかりとして分業の発展過程についてごく基本的な考察をしてきたが、それをここで要約的に示せばつぎのようにいえるであろう。

分業の拡大、発展は、人間の社会的結合の拡大、発展にほかならないが、しかし、人間はそれを意識的に行なってきたのではない。商品、貨幣、市場に媒介されて知らず知らずのうちにその結合をとり結ぶのである。それ故、人間の社会的結合は物的な関係として現われ、また物的形態においてその結合の発展、拡大がもたらされるのである。しかし、この発展はけっして平穏無事に行なわれるのではない。生産者たちを好むと好まざるとにかかわらず競争にまきこみ、したがって矛盾と動揺をつうじて、敵対的な性格において発展していくのであり、そしてそれは不可避的に私的生産者の両極分解を条件づけ、否応なしに資本主義的生産への発展を推し進めざるをえない。ところが資本主義的生産はもっとも発展した商品生産社会であり、したがって「もっともひろがりつくした分業」（『ドイツ・イデオロギー』前出一二五頁）であり、したがってまたもっとも広範な人間の結びつきがもっとも激烈な敵対的な性格をつうじて現われる社会にほかならないのである。

「資本主義は、中世的な共同体、同業組合的協同組合的等々の結びつきを破壊するが、そのかわりに他の結びつきをもたらすのではないか？　商品経済そのものがすでに、生産者のあいだの結びつき、市場によって設定される結びつきではないか？　この結びつきの敵対的な性格、動揺と矛盾にみちた性格は、けっして、その結びつきの存在を否定する権利を与えるものではない。そしてわれわれが知っているように、矛盾の発展こそがこの結びつきの力をますます強く暴露していくのであり、社会のすべての個々の分子と階級を強制して団結にむかわせるのである。しかもこの団結は、もはや一つの共同体とか一つの地区

とかいう狭い限界内のものではなくて全国民のなかの、さらには相異なる諸国にさえわたる、特定の階級のすべての代表者たちの団結なのである。」（レーニン全集二巻二〇四頁）

「資本主義は、国家全体における生産の社会的性格をつくりだす。『個人主義』は、社会的結びつきを、破壊することにある。しかし、市場は、それらの結びつきを破壊するが、そのかわりに、もはや共同体や身分や職業や狭い営業地域、等々によって結びつけられていないおおぜいの個人のあいだの結びつきをつくりだす。資本主義によってつくりだされる結びつきは、矛盾と敵対で現われるものであるから、それでわがロマン主義者は、この結びつきを見ようと欲しないのである。」（前出二一〇頁）

分業によって、したがって市場をつうじて形成される「一つの共同体とか一つの地区とかいう狭い限界のものではなく、全国民のなかの、さらには相異なる諸国にさえわたる、特定の階級のすべての代表者たちの団結」、これは「矛盾と敵対の形態」で、すなわちプロレタリアートとブルジョアジーのあいだの矛盾、敵対となって現われる。プロレタリアートは、この矛盾、敵対をつうじて、資本によって強制された結合を彼ら自身の意識的な自覚的な結合体に転化し、彼ら自身の権力を樹立するとともに生産手段を彼ら自身の直接的な支配下に置く。しかし、これによっていっさいの矛盾、いっさいの対立がなくなるのではない。ここからすべての勤労人民が、結合労働力の一員として国家の統治に自覚的に参加し、社会的生産を自主的に管理することをまなぶための、これまでにない大規模な、ほんとうの大衆的な前進運動が始まるのであり、そしてこの運動のなかでこれまでの固定的な分業も次第に打ち破られ、自己の労働能力を全面的に開花させ、そしてまたこれによって生産力の飛躍的な発展が可能となるのである。この運動は、社会主義社会の本性上当然とはいえ、プロレタリアートの独裁権力の指導による政治闘争として展開されざるをえないが、しかしその本質はやはり経済の問題であり、この政治闘争が経済発展の推進力であり、そしてプロレタリアートの独裁それ自体が一つの経済的な力であることを理解することが必要である。

右のような政治と経済についての弁証法的関係、および人間労働力の無限の発展可能性を正しく把えることができず、現在のオートメーション化された機械にばかり目を奪われることになるならば、中国のプロレタリア文化大革命が提起した決定的に重要な意味も理解できず、「だから場合によっては――非常に陳腐な、通俗的な表現になるけれども――生産力の発展をがまんして押えても、人間の平等性を追及することがある条件のもとでは必要だ。『文革』もそうだと思うけれども、そういう政治的な取り組みをやっていかなければならない。あるいは思想的な取り組みをやっていかなければならない。社会的な変革もやっていかなければならない」[25]（山内一男、前出六七頁 傍点―原田）といったような「非常に陳腐な、通俗的な」な理解におち

いることになるのである。

以上で本稿を終るが、本章の冒頭でも述べたとおり、ここでは分業についてごく基本的な考察――それもきわめて不十分なものでしかないが――をしたにすぎない。分業と生産力、生産関係の関連、および意識、国家等との関連についてさらに詳細な考察が必要と思われるが、これらについてはいずれ稿をあらためて考察したいと思う。

（25）プロレタリア文化大革命を支持される山内氏の見解が、それをまっこうから批判される芝田進午氏の見解とその根本においてまったく一致しているということは、きわめて興味深い現象といわなければならない。芝田氏はつぎのように云う。

「『物質的豊かさ』か、『精神的豊かさ』かと、両者を機械的に対置させ、前者のかわりに後者のみを強調することは、非歴史的・空想的であるのみでない。かつての批判的＝空想的社会主義者・共産主義者のように、『全般的な禁欲主義と粗雑な平等主義』におちいり、ひいては『技術革命』にたいして『文化大革命』を政治主義的に優先させ、独走させた『中国型社会主義』に傾斜するおそれがあろう。」（『現代と思想』十二号青木書店三一頁）

もし、芝田氏が学問的良心をもちあわせているならば、中国がいつどこで「全般的な禁欲主義と粗雑な平等主義」を主張したか、それを実証する事実なり文献なりをあげて説明していただきたいものである。また、「技術革命」と「文化大革命」を「機械的に対置させ」、「文化大革命」を「政治主義的に優先させ、独走させ」て理解しているのは、ほかならぬ芝田氏である。「文化大革命」は「技術革命」と対立するものではないし、ましてやそれを排除するものではない。逆に、「技術革命」を飛躍的に発展させることが一つの重要な目的だったのである。問題は、技術革命にしても、その主要な担い手は誰か、また誰が担うことによってその広範かつ飛躍的な発展を保証することができるか、ということにあるのである。もちろん、この主要な担い手は労働者、農民でなければならない。それとも氏は、一部の専門家、知識人でなければならぬ、と言われるであろうか。もし、前者でなければならぬとすれば、これまでの科学、技術研究の専門家による独占を打破することが必要であり、そして、そのためには上部構造の領域における変革が、すなわち文化革命が必要であるということは論をまたないであろう。